

徒然草の生活観

——無常観のみえる章段を中心に——

古 賀 節 子

二、同語句の反復により、読者を自からの感動裡に引き込もうとする勢とねばりが感じられ、その切々たる情感を露出している。

三、一首の構造上からみた疊用反復、及び対句、反對語の疊用手法は、作者の思想、感情、情緒のうねりと強調点を示し、歌形に変化を与えている。すなはち、才ある作者の技巧を思はせ、早熟な少女が早口にものを云うような調子と云つた斎藤茂吉の評もうなづける。

四、前語句の意味を補う手法では、時間的空間的により具象化を求めようとする作者の表現的心情が忍ばれる。

五、晶子の疊用反復の頻用は、一方に彼女の浪漫的自我感情、及び思想のニュアンスを捉えようとする態度——分析的——と、一方に独創的な声調を作ろうとする要求からきている。意味的にも、形式的にも常用の語法を破つたものがあるのもこの為である。

要するにこの小論を通して云えることは、「疊用反復」の表現手法が、浪漫的な「みだれ髪」の「みだれ髪」的作風を裏付けるに充分な効果と意義を齎らしたと云うことである。

これらが如何に評されようと、この因子があるが故に「みだれ髪」の作者晶子は、当時の詩歌界において革新の動機となり得たのである。

(三十三年度卒業)

徒然草の根本思想が仏教的世界観、即ち、無常観に基くことは、今更云うまでもない。又、素材の面に於ても、その大半をしめるのが人間である、ということは、一読すれば背けよう。遁世した作者の目は、心は、常に、人間、その生活にむけられていたのである。そして、作者の無常観は、詠嘆的無常観から自覚的無常観へと発展していった。その時、作者は人間生活に対してどう考えたか。無常観の発展にそつてみていきたい。

「日本古典文学大系30」西尾実 校注使用

一、成立時期への疑問

橘氏の一年間執筆説は、本文研究が進むにつれて疑問を生じてきた。即ち、現行流布本はあまりにも整いすぎた感があること、短期間で出来たものにしては、思想の変化が甚しいこと、等の点についてである。こゝに、小山氏によつて、上下三十六の欠段がある青表紙本が発見されたのである。小山氏は、上巻三十二の欠段は、後に作者の手によつて増補されたのであつて、前記の疑問を解決するもの、と云われる。これを全面的に信じてよいかどうかはまだ確

定しないが、こゝでは本題を進める便宜上、これを参考に
して、四期に分けてみた。西尾氏が指摘された三十数段ま
でを才一期、欠段を除く上巻残りを才二期、下巻二一段
までを才三期、下巻残りと上巻欠段部分を加えた五十数段
を才四期とした。

二、第一期

「あだし野の露きゆる時なく、鳥部山の烟立ちさらでのみ
住みはつる習ひならば、いかに、もののはれもなから
ん。世はさだめなきこそ、いみじけれ」作者は、無常の世
を讚美して、情趣の存在は無常にある、と云う。この考え
は二十一一段にもみえる。「月ばかり面白きものはあらじ」
という人と、「露こそあはれなれ」と云う人の争いに対し
て、「折にふれば、何かはあはれならざらん」「月・花は
さらなり。風のみこそ、人に心はつくめれ。岩にくだけて
清く流るゝ水のけしきこそ」いつみてもいと、平安朝に
賞美された月・花・露・水・風等、移ろいやすい自然を、
趣あるものとして示す。いずれも、不定である所に、もの
のあはれを感じているのである。そして、日常耳にし目に
する自然物に不定をみた作者は、更に蜻蛉は夕を、蟬は春
秋を知らない、と、世の無常を生物の世界に見出し、人間の
生命の永さに言及する。一年間でも気持次第では随分なが
い。それにどうせ死ぬなら四十位でと生き方めいたことに
ふれる。この生き方については、人の榮枯盛衰をうたう二

十五段にもよく出ている。権勢を一人じめた道長、その
志も、今は、荒廃した寺院・館の跡にわずか偲ばれるだけ
だと、榮華の遺物に無常を感じる。慈悲を忘れ、人民の窮
乏をよそに、「萬にきよらを尽していみじ」と思う為政者
を非難し、外国の調度品迄使つて飾りたてた家は、「見る
目も苦しく、いとわびし」と生活態度に厳しい批判を与え、
「また、時の間の烟ともなりなん」「萬に見ざらん世まで
を思ひ掟てんこそ、はかなかるべけれ」と無常の世におけ
る人間のあり方にふれる。このように、無常を自然、生
物、社会、建物にまで見た作者は、その中で生活する人
間、その心に焦点をしぼる。二十六段で述懐するのは、死
者との別れは免れ得ない世の定めで仕方のない事だが、生
きている人、殊に、嘗て相愛した男女が、何時の間に他
人のようになつていく現実、人の心の変わりゆく事に対する
悲しみである。これは二十七段も同じで、天皇の地位にあ
る時は、人の取巻も多いが、一旦、退位なさると「今の世
のこと繁きにまぎれ」て院に伺う人もないと、権力者に
こびる人心を、鋭くついている。両統更迭の直前である。
当時の政治の実情が伺えよう。それは、当然、才一段でみ
た「御門の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、
人間の種ならぬぞやんごとなき……」と対比出来るだろ
う。神格化した、尊い、最高の位天皇、その子孫の方々の
地位が、権力者の意志で自由になるという現実、どんな

ふれる。この生き方については、人の榮枯盛衰をうたう二

氣持で接したか、世の無常を感じるのも当然といえる。そして「かゝる折にぞ人の心もあらはれぬべき」と日常生活における心の修養というか、心の持ち方を暗示するよう結論ずける。そのうちに「しづかに思へば、よろづに過ぎにしかたの恋しさのみぞせんかたなき」と懐旧の情を語り出す。今は故人となつた人が、何気なく書きとめていた文や絵等は、その人を思い出して懐しく、現にいる人のも、何時頃だつたなあとか、想いを馳せる時、一入感慨をそゝるし、「手なれし具足なども、心もなくて変らず久しき。いとかなし」と万物無常の世に、ものあはれを感じ作者は、変らず存在する無心のものに又、深い心を寄せている。所で、三十段には、「人のなきあとばかり悲しきものはなし」と云う。人の死そのものではなくて、死後の諸事を悲しみ、無常の世に言忌みまする人の心根を非難する。「古き墳はすかれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ悲しき」生者必滅、万物無常の世に対する切々たる悲情がつゞられてゐる。

この様に、才一期では世の無常を嘆いてゐる。だが、その嘆きも方丈記と異るのは勿論である。それは、去りゆくものへ愛情の情を吐き、無常をはかなんで逃避し、逃避出来ぬと悟つて嘆息するばかりだつた。しかし、これは「世は定めなきこそいみじけれ」と肯定している。それは、未だ多分に詠嘆であり、情趣の存在場所としての肯定であ

地位が、権力者の意志で自由になるといふ現実に とんな

る。無常をとく心も、美に憧れる心でしかないようだ。ただ、人の心、無常の世における生き方に対して「人は已をつゞまやかにし、奢りを退けて、財をもたず、世をむさぼらざらんぞ、いみじかるべき」と生活態度に言を及ぼしている所には、嘆息をこえた進歩がみえる。

三、第二期

一期において、無常の世での生活態度、人の心のあり方等、修養が必要だと暗示めいたことが、二期には、その具體的な方法として、求道生活に入る事を奨励する。とかく、人は危機に会つてはじめて、過去のあやまちに氣付くものである。しかし、それでは万事終つたのも同然である。墓の多くは、幼くして死んだ人であるから、人は、常に、無常迅速の世であることを認識して、仏道修行をする氣持を持たねばならない。この道理を知らない愚かな人は、名利に溺れて一生苦しむ。智慧とか善であることなども、必要なようであるが、それも、結局は、世の中の評判をよくする為のものにすぎないし、死ねば何の役にも立たない、と云つて、遂には「いかなるをか智といふべき。可、不可は一条なり。いかなるをか善といふ」「萬は皆非なり。言うにたらず、願ふにたらず」とすべてを否定する。これには、人は何を求めて生きるべきか、疑問をもつのは当然である。直接の解答はないようだが、作者は、まことの人の定義をのべる。「智もなく、徳もなく、功もな

く、名もなし、誰か知り、誰か伝へん。これ、徳を隠し、愚を守るにはあらず。本より賢愚・得失の境にをらざればなり」と。勿論、まことの人のたれと云うのではない。それ以前

の過程、仏道に励めという。当時の仏教は、もう平安時代のような、貴族のみのものではなかつた。末法思想の波にのつた新興仏教は、急速に、民衆の心を捉え、その生活に入りこんだ。庶民の仏教であつたのだ。長寿、名利を求めて、東奔西走する人々に対して、「身を養ひて何事かを待つ。期する処、ただ老と死とにあり」「命は人を待つものかは」「無常の来る事は、水火の攻むるよりも速し」

「大事を思ひ立たん人は、去りがたく、心にかゝらん事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり」と追いたてるように修行をすゝめる。だからといつて死をおそれ、悲しむのは「常住ならんことを思ひて、変化の理を知らねばなり」無常を認識しないために生ずる、迷い、生活態度であるといつてゐる。そして、赤舌日のことに及び、人心不定・物皆幻化の世である、「吉凶は人によりて、日によらず」と迷信を否定し、人の心が主体であるという。ところが、仏道生活にすゝむ心得としては、「道心あらば、住む所にしもよらじ」と云う人に答えて、心は外界の動きにひかれるものであるから、「閑ならでは道は行じがたし」と述べてゐるのである。作者は、赤舌日のことでは、心に主体性をもたせており、こゝでは、諸縁にひかれる心、外部

り。信をも守らじ。礼義をも思はじ。この心を得ざらん人

のものに誘意性がある、と云つてゐる。この矛盾らしきことには、才三期において、作者自身の解答がなされてゐるので、その時、みることにする。

ところで、作者が、このように熱心に説いてゐる、求道生活といふことは、信仰心からというよりも、無常の世に迷ふことなく、心身を静かに保つたためのもののようである。即ち、「人と生れたらんしるしには、いかもして世を遁れんことこそ、あらまほしけれ」と云つてゐることばにも感じられる。それは信仰ではない。別のものがある。九十八段「一言芳談」で共鳴したことの中に「仏道を願ふといふは、別の事なし。暇ある身になりて、世の事を心にかけぬを才一の事とす」とある。或は、三十八段に、名利にあくせくして、「閑かなる暇なく」一生を過す愚かさ、「閑ならでは道は行じがたし」更には、つれづれわぶる人に独居のよさを説き、世間に順応してやつていくと、心が外界の刺激にとらわれて、迷いやすいから、「いまだ誠の道を知らずとも、縁を離れて身を閑にし、事にあづからずして心をやすくせんこそ、暫く楽しぶとも言ひつべけれ」と静かに暮すことを主張する。このように、作者が求道生活をすゝめるのは、信仰をすゝめるのではなく、諸縁からはなれることによつて営み得る、閑居生活を奨励してゐるもののようである。これは、更に強く、主張される。「日暮れ塗遠し。吾が生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時な

趣である。想像美の主張である。これに似た美意識は上巻

り。信をも守らじ。礼義をも思はじ。この心を得ざらん人は、物狂ひともしへ、うつゝなし、情なしとも思へ。毀るとも苦しまじ。誉むとも聞き入れじ」と狂ほしい程の激しさである。そして、作者がこんなに強く云う、放下すべき諸縁についてみると、一二三段に、人に必要なものでは、衣食住と薬を加えた四つが、本当に大事なものであつて、その他は一切否定している。しかし、実用外のすべてを否定した作者も、一道に生きる人を称えるのは勿論である。それは、ただ今の一念、刹那に生きる、ということにおいて一致する。そうして、この時期の、結論らしいものとして、最後に「己を知れ」と云つてゐる。「我を知らずして外を知るといふ理あるべからず。されば、己を知るを、物知れる人といふべし」作者は、自己を知ることがすべての根元であり、それは、求道生活、閑居生活によつて得られると云つてゐるようである。

四、第三期

下巻冒頭を飾る一三七段は、徒然草の美意識というものを、如実に物語つてゐる。そして、作者の筆致も、思考も、ます／＼さえてゐるところである。自然を対象とした文が長い為にも、後の部分に述べられる無常についてのことば、無常觀を、無視したきらいがあつた。しかし、こゝに示される美意識が、無常觀の体得によるものである事は改めて云うまでもないことである。それは心で見る美の

趣である。想像美の主張である。これに似た美意識は上巻にもあつた。八十二段におけるそれは、頽廢美、不具美（不整美）未完成の美であつた。こゝでは、感覺器のみによる美の会得ではなく、間接的に見ることに、客觀視にまですすめる。祭見物で感じたあはれ、世の無常、こうして一連の美意識は、無常である世に生かされる。「亢龍の悔あり」「萬の事も、始終こそおかしけれ」人世は大河の流れのようなものである。そして再び、自然と人生との対比である。「春暮れて後、夏になり、夏はてゝ秋の来るにはあらず」春は夏に、夏は秋に通じてゐる。木の葉は、落ちてから芽ぐむのではない。下から芽生えてくる力におされ、堪えきれずに落ちるのである、と微妙な自然の推移を、確實に把握し、敘述してゐる。しかし、それでも四季には順序があるが、人世に順序はない。老少不定の世の中である。死は時、場所を選ばずにやつてくる。だから、人が常に心得て置くべき事は、「萬の事、外に向きて求むべからず。たゞこゝもとを正しくすべし」何よりもまず、自分を正しくする事だという。それには、求道生活をするのである。そして、一五七段では、〃触るゝ所の益〃と諸縁の誘意性を認めており、二〇六段に於ては、「あやしみを見てあやしまざる時は、あやしみかへりて破る」と逆に、心に主体をおいてゐる。この矛盾とみえることも（二期にもあつた）作者自身の解答がある。「事理もとより二つなら

ず」現象も実体も、元来一つのものであると、差別のない世界に解答を求めているようである。作者は、常に人間をみつめた。そこで、老少不定の世、無常変易の境に生きる人間に対し、心を広くもて、「人は天地の靈なり。天地はかぎる所なし。人の性なんぞことならん」と、絶対的な位置を与えている。それは又、同時に、人間は、本来そうあるものである。そうあつてほしいという、作者の深い願いがこめられているのではないだろうか。

作者の無常観は、一期のそれが著しく詠嘆的であつたのに比して、二期、三期のそれを見ると、客観的な立場で、客観視し、自然の法則を見極めて、そのことから又、人間生活の無常を悟っているのである。そして、そこから生れた人間への願い、それは作者の理想であつた。常住不変の世ではなかつた。人間に対する生活態度としての要求は、求道であり、閑居生活をするのであつた。それは、作者の理想像に近づくものとして、提示されているようである。

五、第四期

才一期の詠嘆的無常観は、才二、才三期に入つて、自覚的な無常観に發展したことはわかつた。その後、作者は、無常に関することを云つていないようである。その理由は残念ながらまだわかつていない。ただ作者の円熟した、鋭い洞察力、思考力はみられる。一二九段「よき細工は、

少しにぶき刀をつかふといふ。妙観が刀はいたくたゝず」これは、単に、細工の道だけに通用するのではない。すべての道に通ずる奥義である。尙、二四一段にみえる無常は、今迄の主張をくり返したにすぎないのではないか。

さて、徒然草が、南北朝頃に書かれたとしては、それに関することがないと、屢々、問題にされている。八十段に目を通してみよう。その前半、専門外の事を好む人に対する非難は、後半になると、武を好む世の風潮を嘆いて、「人倫に遠く、禽獸に近き振舞」と武に対する痛烈な批判となつてあらわれている。乱世であつた。「その家にあらずは、好みて益」なしという婉曲な敘述は、「人倫……」のことばと共に考えられよう。この僅か数行は、作者の気持ちをそっくりあらわしており、ひいては常に、人間らしい生き方を希求する本心のあらわれであると思う。

結 び

万物無常、無常迅速の世に於ける、人間のあり方、生活への態度、心構えを養うものとして、求道生活を奨励した。しかし、それは諸縁放下によつて営み得る、閑居生活の提唱であつた。そこに作者の理想がある。刹那を生かし本當に価値ある生き方を示そうとした、だがそこに生れたのは、世を遁れるという、至つて消極的な方法であつた。